

## 月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-10

辰巳の素性を明かさなかったせいで、その謎めいた雰囲気やバーでの言動に加えて黒塗りの高級車ともなると、要人の扱いに慣れている老舗ホテルのスタッフと言えども、さすがに好奇心をくすぐられた。

ホテルスタッフがプライバシーの配慮をわきまえていたとしても、当地ではメディアへの露出度も高い独り身で男の影すら無い女杜氏が豊年虫の桔梗でミステリアスな異性と一夜を共にしたとなれば噂が漏れることは必至だった。

20日の彼岸から23日の秋分の日迄の4連休とあって、『W酒蔵』も観光客の対応で忙しかった。

22日の午前8時過ぎにホテルから戻った麻里子は、内緒で持ち帰ったシャトー・ディケムのコルク栓を感慨深げに小物入れにしまうと白衣に着がえて足早に事務所へ行った。

事務員や蔵人と朝の挨拶を交わした麻里子は、どこかに後ろめたさを意識しながらも、会社の将来性に期待が生まれたことで、どことなく気持ちが華やいでいた。

「専務さん、何かいいことでもあったのですか？」と長年にわたり苦楽を共にしてきた女事務員はふたりきりになってから訊いた。

「そんな風に見えますか？」と麻里子は白衣の襟を左手で触りながら聞き返した。

「そんな風に？。そりゃあそうですよ」と女事務員は切り口上に不満顔で言った。

「強いて言うなら、風景がいつもとは多少違って見えるからかしら」と麻里子は彼女になら話のさわりだけでも伝えておきたい衝動に駆られたものの、打ち明けると希望が遠のいてしまいそうで、はぐらかして答えていた。

「そういうことにしておきましょう」と女事務員は嫌味を言うと仕事に戻っていった。

彼女を冷たくあしらってしまい悪かったなと後悔した麻里子は、後で食事にでも誘って埋め合わせをしようと思った。

社長室のデスク周りにあるファイルボックスから、兄の昌幸が記録したコメ焼酎にかかわる資料を抜き出した中にUSBメモリが入っていたので、LaVie Lを立ち上げて接続すると詳細なデータと何枚かの写真が表示された。

画面を見ているうちに兄の面影がダブって麻里子は涙を滲ませた。

昌幸の会社再生プランは、死を予感していた病と女への熱烈な愛が要因で頓挫したけれど、その当事者である真紀の介在で巡り会えた麻里子と大手酒造メーカーの社長との突然燃え上がった愛の炎により、形態を変えて息を吹き返すことになった。